2016　夏休みすいせん図書

～本の森へ～

西東京市図書館

1・2年生

「わらう」　浜田桂子 作／福音館書店

　ぼくはにいちゃんとのにらめっこで、いつもわらってしまう。あるひ「あしたはぜったいわらいませんように」とおまじないをした。つぎのひ、ぼくははじめてにらめっこに、かった。うれしかったけど、へんなんだ。いちにちじゅう、みんながぼくのことをしんぱいしていた。わらわないおまじないが、ずっときいていたみたい！

「ぼくのジィちゃん」　くすのきしげのり 作　吉田尚令 絵／佼成出版社

　あしたは、うんどうかい。いやだなぁ…。ぼくは、クラスでいちばんはしるのがおそいんだ。そのよる、いなかからジィちゃんが、うんどうかいのおうえんにきてくれた。でも、ウサギのテーシャツをきたジィちゃんは、なんだか、かっこわるい。
　そして、うんどうかいのひ、わかったんだ。ジィちゃんのすごいひみつが。

「かわいそうなぞう」　つちやゆきお ぶん　たけべもといちろう え／金の星社

　にっぽんがせんそうをしていたころ。もしもどうぶつえんにばくだんがおちて、どうぶつたちがまちであばれてしまったらたいへんなので、どうぶつたちはころされることになりました。にんげんだけでなく、どうぶつたちもつらいおもいをしたせんそう。にどとくりかえさないで、というきもちがつたわってくるおはなしです。

「たんけん絵本 東京駅」　濱美由紀 作画／小学館

　東京駅に行ったことはあるかな。日本の陸の玄関口だよ。開業したのは1914年（大正３年)。今から100年も前のこと。今はたくさんの電車が到着したり、出発したりしていて、28ものホームがあるんだって。東京駅のひみつを、かみなりくんが案内してくれるよ。

「あたし、うそついちゃった」　ローラ・ランキン さく　せなあいこ やく／評論社

　ルースは、がっこうのやすみじかんに、こうていでちっちゃなカメラをひろった。とてもすてきなカメラで、ルースはおおよろこび。このカメラは、ともだちがおとしたものだったけど、じぶんがおたんじょうびにもらったカメラだと、うそをついてしまった。さて、ルースはほんとうのことをいえるかな。

「ねこの手かします」　内田麟太郎 作　川端理絵 絵／文研出版

　「ねこの手もかりたい」ということばをきいたことはありませんか？
「ねこの手や」はそのなまえのとおり、いそがしいときなどに、ねこの手をかしてくれるかいしゃです。おちゃとまんじゅうのみせ「ねこのひるね」で「ねこじたまんじゅう」とたのむのがあいことば。どんなおきゃくさんがくるのでしょうか？

「しゅくだいさかあがり」　福田岩緒 作・絵／ＰＨＰ研究所

　夏休みのしゅくだいはさかあがり。でも、ぼくは何度やっても一度もできない。ぜんぜんできなくて、れんしゅうにつきあってくれるさとしにも、どなってしまった。もう、さかあがりなんてできなくていいと思ったけれど、公園で男の子たちがあきらめずにセミをつかまえるのを見て、もう一度やってみた。

「ハリーとうたうおとなりさん」　ジーン・ジオン ぶん　小宮 由 やく
マーガレット・ブロイ・グレアム え／大日本図書

　ハリーのいえのおとなりさんは、うたをうたいます。そのこえがたかくて大きいので、ハリーはなんとかしてやめさせようとします。おとなりさんのまどの下でほえたり、うしのなきごえやおんがくたいのえんそうをきかせたり。でも、うまくいきません。あるひ、うたのコンテストが行われることになりました。

3・4年生

「おばあさんのしんぶん」　松本春野 文・絵　岩國哲人 原作／講談社

　七十年いじょう前のおはなしです。五年生になったてつおは家がゆうふくでないため、しんぶんはいたつを始めました。みはらのおじいさんは「はいたつしたしんぶんをよみにおいで」と言ってくれます。てつおは毎日しんぶんをはいたつし、おじいさんがなくなっても休まずつづけました。それはおばあさんが、これまでどおりしんぶんをよみにおいでといってくれたからです。

「タケノコごはん」　大島渚 文　伊藤秀男 絵／ポプラ社

　日本が戦争をしていたころ、ぼくたちの組につよくてほがらかな、さかいくんというともだちがいました。でも、さかいくんはおとうさんが戦争で亡くなってから、ときどきよわいものいじめをするようになりました。しばらくして、ぼくたちの担任の先生は戦争にいき、かわりの先生がきました。さかいくんもぼくたちも、そのやさしい先生がだいすきになりました。だけど先生も、戦争にいくことになったのです。

「２分の１成人式」　井上林子 著　新井陽次郎 絵／講談社

　あたし、桐谷ユメ、十才。アニメ「魔法少女マリン」が大好き。だけど、ようちっぽいって思われるから学校ではひみつ。勉強も、習い事もあまりとくいじゃないし、とりえもなくて、なんだか最近、心がしぼんでる。そんなとき、学校で「二分の一成人式　文集ノート」を書くことになった。「未来の予定表」「将来のゆめ」… 未来なんか、想像できない。「魔法少女マリンになりたい」なんて、書けない。どうしよう。

「二日月」　いとうみく 作　丸山ゆき 絵／そうえん社

　あたしには、芽生という妹がいる。ミルクを飲むとすぐに吐いてしまう。だから大きくなれない。そんな芽生は、病院の先生に「障がいが出るだろう」と、言われた。だからママはいつも芽生につきっきりで、あたしは、さびしかった。おもわず「芽生が生まれてこなければよかったのに。」と、言ってしまった。あたしは、小さな芽生を守ってあげなきゃいけないのに。あたしは、いやなコ。自分がきらいになった。

「メリサンド姫―むてきの算数！―」　E・ネズビット 作　灰島かり 訳　高桑幸次 絵／小峰書店

　むかし、人間と妖精がいっしょにくらしていたころに生まれたメリサンド姫。
　王さまの反対で、たんじょう祝いの会をしなかったため、妖精に呪いをかけられてしまいます。 それは、メリサンド姫が一生はげ頭になるというものでした。何でも願いのかなう魔法の小箱で、妖精の呪いをとくことができた姫でしたが、その願いが、またたいへんなことをまきおこします。算数も出てくるお話です。

「ゾウの鼻が長いわけ―キプリングのなぜなぜ話―」　ラドヤード・キプリング 作　藤松玲子 訳／岩波書店

　むかしむかし、ゾウの鼻が短かったころ。知りたがりやのゾウの子はワニが何を食べるのか知りたくて、遠くの川へでかけていきます。まんまとワニにだまされて、鼻をかまれて引っぱられます。そうするうちに鼻がどんどんのびてきて…!? ゾウやヒョウ、ネコやカンガルーなど、いろいろな動物の楽しい12の物語です。

「干したから…」　森枝卓士 写真・文／フレーベル館

　れんこん・りんご・しいたけ・ぶどう…干した食べ物。私達のまわりにもいっぱいあるけど、世界じゅうを歩いた著者が、世界のいろんな干物を大紹介。ブータンの市場で見つけた、がちがちにかたいチーズ。ラオスではコウモリの干物も！
　ところで、どうして食べ物を干すのだろう？干さなくても食べられるのに。干すことのふしぎにせまる。

「築地市場―絵で見る魚市場の一日―」　モリナガヨウ 作・絵／小峰書店

　みなさんがいつも食べている魚はどこからやってくるのでしょうか？ 日本や世界各地の水産物が集まるのが、東京都中央卸売市場築地市場です。この本では、鮮魚が取引される様子や市場ではたらく人の様子、いろいろな運搬車などをこまかいイラストで紹介しています。

５・６年生

「スワンーアンナ・パブロワのゆめー」

ローレル・スナイダー 文　ジュリー・モースタッド 絵
石津ちひろ 訳／ＢＬ出版

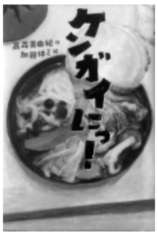
アンナは、はじめてバレエをみました。舞台のうえでくりひろげられているのは、バレエ<眠れる森の美女>。アンナはむちゅうになり、バレエ学校のとびらをたたきましたが、その時はまだちいさすぎました。おおきくなったアンナは、みごと、バレエ学校に合格！毎日レッスンをかさね、ついに舞台にたつ日がやってきました。

「べんり屋、寺岡の夏。」

中山聖子 作／文研出版

小学校５年生の寺岡美舟は、将来の自分をテーマにした作文に『まっとうに生きる』と書いた。売れない絵ばかりかいて、ろくに家にいない画家の父の代わりに、家計を支えている祖母と母のたいへんな姿を見ているからだ。そんな美舟の家は、べんり屋。毎日たくさんの依頼が来て、夏休みには美舟も家業を手伝う。そのことで、将来に夢を持てなかった美舟の気持ちは変わっていく。

「ケンガイにっ！」



髙森美由紀 作　加藤休ミ 絵／フレーベル館

オレ、田中俊。弟の健太が死んでから、父ちゃんも母ちゃんも仕事ばかり、家族ばらばらの食卓に変わってしまったオレの家。ネットゲーム三昧、寝るのはいつも日付が変わってからというオレを、父ちゃんと母ちゃんは夏休みにいなかのばあちゃんちへ送り込んだ。スマホ持参で新幹線とバスを乗り継ぎ、二キロの道を歩いてようやくたどり着いたばあちゃんち。だけど、そこはネットがつながらない「圏外」だった。

「ワンダー」

R.J. パラシオ 作　中井はるの 訳／ほるぷ出版

生まれつき顔に障害があるオーガストは、10歳まで家でおかあさんに勉強を教わっていた。初めて学校に通うことになったオーガストの顔を見て、生徒たちは悲鳴をあげ、じろじろながめ、やがて避けるようになった。それでもオーガストの話を聞いて、理解してくれる同級生は少しずつ増えていった。オーガスト、姉オリヴィア、親友ジャックなど、いろいろな人の視点から書かれたひとりの男の子の物語。

「ねずみの騎士デスペローの物語」

ケイト・ディカミロ 作　子安亜弥 訳　ティモシー・バジル・エリング 絵／ポプラ社

お城のかべのおくで誕生した、ハツカネズミのデスペローは、変わったネズミでした。図書室でことばにふれ、大きな耳はあまい音楽を聞いていたのです。ある日、音楽にさそわれて穴の外にでてしまったデスペローは、ピー姫にみつかってしまいます。それは、ハツカネズミのおきてをやぶるものでした。ハツカネズミ会議で、地下牢送りとなったデスペローはそこで、大変なたくらみを知ることとなります。

「神社・お寺のふしぎ100 ～すぐ近くにある「日本人の心のふるさと」のなぜ～」

田中ひろみ 文　藤本頼生 監修　東京都仏教連合会 監修　偕成社編集部ほか 写真／偕成社

新しい年の初めにお参りすることが多い神社やお寺。みんなはどこへ行きますか。入り口にある「手水舎」は手を洗うところ。なぜ洗うところがあるのか、知っていますか。 神社の入り口にある「鳥居」にはどんな意味があるのでしょうか。この本を読むとわかります。さて、この表紙の神社、知っていますか。（ヒントは市内の神社）

「ガザー戦争しか知らないこどもたちー」

清田明宏 著／ポプラ社

中東、シナイ半島の北東部、東地中海に面した、小さな土地。８メートルもの高さの壁などに囲まれた、移動の自由が奪われた都市。それがガザだ。ガザをふくむこの地域では、1948年から、ずっと戦争が続いている。ここでは、６歳以上のこどもはみな、３回以上の戦争を経験している「戦争しか知らないこどもたち」だ。ガザのこどもや、街の様子を写真で紹介。

「かき氷―天然氷をつくる―」

細島雅代 写真　伊地知英信 文／岩崎書店

天然氷でつくられたかき氷を食べたことがありますか？自然の寒さがつくった天然氷は、明治時代から現在までむかしながらのつくり方で、そのほとんどが人の手間をかけてつくられます。この本では、どのように天然氷をつくっていくのか、やり方や使う道具などを写真で紹介します。